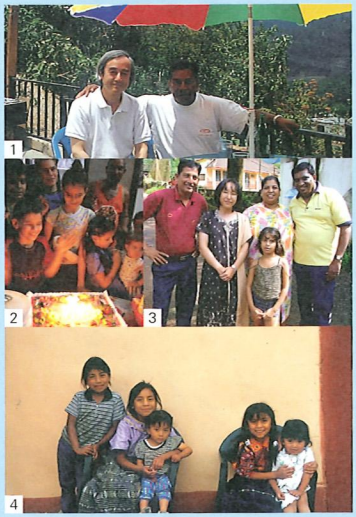
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Interface humanities 04
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12959
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka



1. グアテマラで深刻な水不足と、岩盤崩落事故について聞き取り調査をおこなう小泉潤二教授（左）
2. キューバの子どもの誕生日の様子。撮影：田沼幸子
3. インド・ゴア州で人口の約３割を占めるキリスト教徒の調査をおこなう松川恭子助手（左２番目）
4. グアテマラの子どもたちを撮したフィールドのひとこま。撮影：小泉潤二

流動性と閉鎖性のダイナミズム　トランスナショナリティ研究

文：編集部

21 世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」の一翼を担う「トランスナショナリティ研究」。人間科学研究科の人類学研究分野を中心とするこのプロジェクトの視点とこれまでの約１年半の取り組み、そして展望を取材した。

現代、さまざまな人やモノ、情報が大都市間はもとより辺境の地にいたるまで、驚くべき量とスピードで移動していることは、程度の差こそあれ、誰もが実感している。このような状況は、一般にはグローバリゼーションとかグローバリズムといわれてきたが、これらの言葉は世界が、均質化するイメージであり、アメリカ中心的なニュアンスが強い。世界各地でおきている移民・難民をはじめとするさまざまな越境現象は、それぞれ異なる意味と性格をもっており、互いに作用しあうさまを一様に語ることはできない。

そうした視点から、トランスナショナリティ―トランスナショナル（国を越える）という形容詞を名詞化した概念―という言葉を鍵に、越境現象を個別な動きとして、個別のフィールドにおいてとらえるのが、トランスナショナリティ研究の試みだ。

問題のクラスター化

プロジェクトの柱となっているのは、月平均二回のペースで実施されている「トランスナショナリティ研究セミナー」である。二〇〇二年一二月から一年半あまりの間に、二九回（七月二日現在）のセミナーが開催された。人類学のみならず歴史学、社会学、心理学など隣接領域の研究者が講師に招かれ、「ホームレス・シェルター文化」「密航する女性たち」「アフリカの紛争」など、多彩なトピックが演題に並ぶ。これらの講演とそれをめぐる議論のなかから、何が生まれてくるのだろうか。

「地域的にもテーマ的にも、多岐にわたるトピックは一見分散的ですが、連続的に数多く議論を重ねてゆくことによって、それぞれの問題のつながりが見えてくる。いわゆる問題のクラスター化ができると考えています。それと同時に人的なつながりも築いてゆきたい。他の専門分野の人たちとの交流や対話のなかから浮かび上がってきた、より大きなテーマに焦点をあてた論集や、セミナーに参加した人たちのネットワークを使った新たな研究プロジェクトが、ここからつぎつぎと生まれてくることをねらっています」とプロジェクト代表の小泉潤二教授はいう。実際、このセミナーの副産物としてシンポジウムやワークショップが開催され、今年三月には『境界の生産性』と題する報告書も刊行されている。

現場で実感される概念

プロジェクトでは、トランスナショナリティ研究の国際的な拠点形成をめざして、研究情報の蓄積と発信、関連資料の収集、国内外の研究者との交流、授業カリキュラムの改変なども進められている。

その取り組みのひとつに、大学院

「トランスナショナリティ研究」グループの研究活動領域

左より事務局をつとめる松川恭子助手、加藤敦典さん、大学院生の竹村嘉晃さん、熊谷高秋さん、徐素娟さん、COE 研究員の田沼幸子さん、小泉潤二教授、栗本英世教授

生の現地調査派遣がある。従来、人類学の学生たちは、指導教官の科学研究費補助金などを利用して調査をおこなってきたが、このプロジェクトの助成によって、独自の関心にもとづいたフィールドとテーマを選んで調査に出られるようになった。すでに、のべ九名の博士後期課程の大学院生が助成を受けている。

では、彼らは「トランスナショナリティ」を自身の研究の中でどのように位置づけているのだろうか。キューバの移民現象を調査するCOE研究員の田沼幸子さんは「フィールドに身を置いてみると、トランスナショナルという言葉は抽象的ではなく、非常に具体的、かつ現場からでてきた概念であることがよくわかります。実際、私が接した人びとの状況は、その地域や国の特殊性と深く関わっていて、グローバリゼーションとかディアスポラといった一般論ではとらえきれない。個別に具体的な越境の事例をみていくこと、それがトランスナショナリティ研究につながるのだと思います」という。院生のテーマには「マヤの木彫りの人類学」「インド古典舞踊の受容と消費に関する研究」など、トランスナショナルとは結びつきにくいように見えるものが多い。しかし、こうしたテーマにも、観光化や出稼ぎといった現象が大きく影響している。トランスナショナリティとは、現場ではじめて実感される概念だと彼らは語る。

動いているものをとらえる

プロジェクトのねらいは単に越境現象を記録するのではなく、そこから生まれるものをさぐるところにある。かつてこれほど軽々と人、モノ、情報が「国境」を越える時代はなかった。しかし逆に、その壁がこれほど高く、厚くなった時代もなかったといえる。「在日ビルマ人を対象にした最初の調査の時から、私たちが国というものに保護され、かつ規定されているのを実感しました。今はどんな辺境の村に住んでいても、国という境界から逃れられない」と田沼さん。人類学はその流動性と閉鎖性のダイナミズムをとらえようとしている。

では、それをどのように？　いまや調査対象はもとより、フィールドワークのあり方じたいが変化してきている。トランスナショナリティ研究の地平は、まさに人類学が直面している、動いているものを動いているままでとらえることの困難さに向きあい続けるところに開けるといえよう。

構成＝三谷研爾

音楽はなにを描くか

ステラ・ジブコバさん（特任研究員）

日本に来てから四年がたちました。ブルガリアにいるとき、ソフィア大学で取り組んでいたのは音楽の表現性、つまり音楽はメッセージを伝えられるか、もし伝えるならそれはどんなメッセージか、といった問題でした。音楽を、美学とカルチュラル・スタディーズの観点から解釈しようとしていたのです。ところが、こうした視点で研究を続けられる大学はヨーロッパには見あたらず、インターネットで阪大音楽学研究室の山口修先生と根岸一美先生のお仕事ぶりを知り、こちらに留学したわけです。

阪大では、テーマに具体性をもたせるようアドバイスをうけ、琴と文楽の三味線音楽を中心にした日本の伝統音楽について、その描写性を研究しています。たとえば琴には水の音を描写する旋律がありますし、文楽でもステージに狐がでてきたら三味線も狐の性格を伝える旋律を奏でます。旋律と歌詞とパフォーマンスが一体となった、描写性の強い日本の伝統音楽は、とても私にアピールするところがあるのです。

音楽が音楽以外のなにか具体的なものや社会のすがたをを表現するといった発想は、ヨーロッパにはあまりありません。日本の音楽は、欧米の音楽に比べて観客の想像力にまかされる部分が多く、自由度が高い。それだけに、観客の負担も大きいと思います。音楽がなにを表現しているかが分かるには、日本の歴史だけでなく、古典文学などについても勉強して、そのコードを理解しなければなりません。じつはその点では、ブルガリアの伝統音楽にも似た性格があって、ブルガリア人でもきっちり理解している人は少ないと思います。

日本の伝統音楽を研究しているうち気づいたのは、ブルガリアの伝統音楽はセンシビリティの面では日本と似ているけれど、描写性は弱いということ。全体としてのメッセージ性はあるが、端的になにかを表現する旋律はあまりないのです。反対にヨーロッパのクラシック音楽と比較すると、大衆的だけれども、理論性に乏しい。そうしたことが見えてきて、あらためてブルガリア音楽のありかたを考えてみたいと思うようになりました。このような関心から、COEプログラムのなかでは「イメージとしての〈日本〉」と「モダニズムと中東欧の芸術・文化」のふたつのグループに関わっていきたいと思います。

ステラ・ジブコバ（Stella Zhivkova）
一九七四年ブルガリア生まれ。一九九七年ソフィア大学哲学研究科卒業。修士論文は「音楽における表情性について」。二〇〇〇年大阪大学大学院文学研究科音楽学専修研究生。二〇〇一年より博士課程に在籍し、博士論文執筆中。研究の中心は、①琴音楽から考察した文化、②異文化コミュニケーションの可能性と実現性。

生まれは那覇ですが、大学生活を送ったのは札幌、去年からこのCOEプログラムに参加して、ようやく日本の真ん中の大阪へたどり着きました。北大時代は、メルロ＝ポンティやレヴィナスなどのフランス思想をもとに対人関係の構造を研究していました。同時に、看護学校や医学部で教える機会があり、学生たちと接するなかで生命倫理に関心を持つようになりました。また、じっさいに患者と対話し、その人が現実に抱える具体的な問題を考えるようにもなりました。

哲学というと、もっぱら書斎で大思想家の著作を読んでは思索するイメージですね。しかし、デカルトが「世間という偉大な書物を読む」といって町へでたように、もともと幅広い知の探求の営みを意味していたはずです。思考とは、つねに他者との対話のなかから構築されていくものであるし、社会問題の解決も、現場の具体的な話し合いのなかにこそ糸口がかくれているでしょう。

いま私自身が取り組んでいるのは、医療や科学技術政策の問題に哲学の立場からアプローチすることです。薬害エイズ問題を例に考えてみましょう。この場合、自然科学的に原因とリスクの因果関係が証明されないかぎり、製薬会社はもとより、行政や専門機関も動きだすことができないという問題がありました。ですが、リスクとは科学的に証明されにくい、不確定な部分が大きなものです。だからこそ深刻な不安を呼びおこします。不安の源について、当該分野の専門家だけでなく、社会科学や人文学におけるさまざまな分野の専門家、そしてなにより利害の当事者および一般市民も参加しての、ふみこんだ対話が欠かせません。それによって、そのつどのリスクのありかをめぐる社会的コンセンサスが得られます。そうしてはじめて、対応策を練ることができるのです。こうしたコミュニケーションの大切さは、環境汚染、ターミナルケアや脳死など死をめぐる問題、さらには非行や虐待といった問題などあらゆる場面にあてはまります。

対話のなかでひとりひとりが知性と感性を鍛え、社会的な意思決定へと歩みよるコミュニケーション技法を磨いていく。その実践の場のひとつが、「臨床と対話」グループが中心となって、中之島センターでおこなわれる哲学カフェやソクラティック・ダイアローグです。専門家と市民とが膝を突き合わせて、具体的な経験に引きつけて語り合う場を開く。対話を重ねていくなかから、公共的なコミュニケーションのあり方とその手法を提言する。それが、哲学が本来めざしていた幅広い知、つまり臨床の知の探求であり、人文学が現代社会にいかされる道だと思います。

社会にひらかれた対話の知

屋良朝彦さん（特任研究員）

屋良朝彦（やら・ともひこ）

一九六五年沖縄生まれ。北海道大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。専門分野は哲学・倫理学。おもな研究テーマは、①医療・介護・教育・心理学の分野におけるコミュニケーションを主軸とした「臨床哲学」、②科学技術におけるリスク・コミュニケーション。著書に「メルロ＝ポンティとレヴィナス―他者への覚醒」（東信堂　二〇〇三年）がある。

構成＝三谷研爾

ih.Topics

「インターフェイスの人文学」のさまざまな活動情報を紹介します。

Event Report 2004

平成16年度　懐徳堂春季講座〈107回〉「生のかたち　死のかたち」

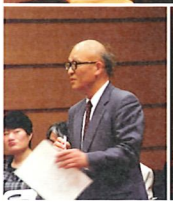
2004年5月25日から28日にかけて大阪大学中之島センターにて平成16年度懐徳堂春季講座〈107回〉「生のかたち　死のかたち」が開催されました。

懐徳堂は、一七二四年に創設された、大坂町人の自助的な人文学センターです。明治以降、その精神と事業は懐徳堂記念会にうけつがれ、さらに第二次世界大戦後は、大阪大学との密接な連携のもとにすすめられてきました。現在の懐徳堂事業は、春秋講座と古典講座を二本の柱とした、さまざまな市民向けの企画からなっています。

往時の懐徳堂は、一八世紀の日本を代表する中井竹山、中井履軒、山片蟠桃といった学者を擁しつつ、町人社会とともに歩むことによって、新しい知のかたちを生み出していきました。私たちはその姿を、「インターフェイスの人文学」のすぐれたお手本と考え、昨年度から春秋講座の後援をしています。

今年度春季講座の総合テーマは「生のかたち　死のかたち」。私たちのプロジェクトでは、とりわけ「臨床と対話」グループが取り組んでいる問題と深く結びつくものです。また、今回から会場となった大阪大学中之島センターは、さまざまな映像・音声の収録機材がととのっており、本COEプロジェクトの重点のひとつであるデータのアーカイブ化事業を試験的におこなう、格好のモデルケースとなりました。講座じたいもまた、四月にオープンしたばかりの中之島センターの機能をいかして、講演やシンポジウムだけでなく、対談や対話という多様なかたちが実験的におこなわれました。

生と死を、医療技術や法制度にかかわる一般論として議論するのでなく、つねに個別的で具体的な場面として考えるという人文学の立場に貫かれた四日間、のべ二〇〇名以上の受講者が熱心に参加されました。



イベントプログラム

5月25日	講演「生と死の習俗―その伝統と現代」 中村生雄（文学研究科教授、日本思想史）
5月26日	シンポジウム「都市の生と死―廃虚とパラダイスのはざまで」 大橋良介（文学研究科教授、美学・哲学） 藤田治彦（文学研究科教授、環境美学・建築史） 鈴木 毅（工学研究科助教授、建築工学） 上倉庸敬（文学研究科教授、美学・芸術学）
5月27日	対談「生と死の表象―近現代文学を中心に」 内藤 高（文学研究科教授、比較文学） 出原隆俊（文学研究科教授、日本文学）
5月28日	対話「生と死はみんなの現場」 中岡成文（文学研究科教授、臨床哲学） 西川 勝（京都市長寿すこやかセンター、臨床哲学）

Activity

COE 研究員による知的ターミナルの構築

「研究集合」へ向けての実験的試みとして、若手の研究者による定例研究会が豊中と吹田で交互に開かれており、現在はメンバーそれぞれの研究を順次紹介している段階です。予め提出されたディスカッション・ペーパーに対し、全員がネット上のフォーラムへコメントを投稿、問題点を共有した上で実際の議論に臨みます。お互いに専門の全く異なるメンバーが会しての自由な討論では、方法論の違い等をめぐって分野間に反発も生じますが、むしろこの衝突から発して各研究の「臨床・横断」可能性を探るところにこそこの研究会の意味があるのです。

Achievements Data

COE 報告書の刊行情報

2004 年 1 月に「インターフェイスの人文学」2002・2003 年度報告書が刊行されて以降の、COE出版物です。

1 **トランスナショナリティ研究ー境界の生産性**

発行日　2004 年 3 月 12 日
責任編集：小泉潤二　栗本英世
編集：丹生絵海子　木村 自

2 **映像人文学　国際フォーラム「映像の力ー日越両国文化の比較と交流のために」：記録拾遺**

発行日　2004 年 2 月 27 日
責任編集：山口 修　桃木至朗
編集：北山夏季

3 **映像人文学　2003 年度報告書 ヨーゼフ・ラスカ《父の愛》**

発行日　2004 年 3 月 24 日
責任編集：根岸一美
編集：岡村 睦

Event Data

イベント情報

2004 年に開催された主なイベントをご紹介します。各イベントの詳細ならびにその他については、ホームページ（http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/）をご参照ください。

（※ 2004 年 7 月 31日現在）

ト 第 24 回～第 28 回 ランスナショナリティ研究セミナー
文化人類学の新たな地平をひらく。本誌 22 ～ 23 ページを参照

ヴァルデンフェルス教授講演会
現象学研究の最前線を語る

海域アジア史研究会 5 月例会
海でつながるアジア世界の探求

第 4 回アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議
生活と美をひとつのものとしてとらえる。本誌 17 ページ参照

第 1 回～第 6 回 MCE（モダニズムと中東欧の芸術・文化）研究会
芸術のジャンルと言語・民族の境界をこえる

「イメージとしての〈日本〉」研究部会　第 1 回
メディアがおりなす〈文化〉のイメージ

「イメージとしての〈日本〉」研究ワークショップ　第 4 回
人文学の対象としてのポピュラー・カルチャー

公開授業「科学と社会」　科学技術と倫理
市民社会とテクノロジーの世界をむすぶ

公開授業「科学と社会」　医療・生命の倫理
ベッドサイドに生きる人文学の知

フィールドのさわめき

シルクロード出土文献の現物調査

佐藤貴保

「中央アジアの歴史を研究するのに、なぜこんなロシアの西の果てまでやって来たのか?」。現地の一般市民は私の渡航目的を知ると、たいていこのような反応をする。ロシア共和国西部、フィンランド湾に面した古都サンクト・ペテルブルク市。ここが私のフィールドワークの現場である。有名なエルミタージュ美術館のある街であり、二〇〇三年に建都三百年を祝しサミット(主要国首脳会議)が開かれたことは記憶に新しい。しかし、私は決してロシアの歴史を研究しているわけではない。

私の研究対象は、十一世紀から十三世紀前半にかけて、寧夏・甘粛地方(現在の中国北西部にあたる)にあった西夏国の歴史である。西夏は農業生産の高くない内陸の乾燥地帯に立地していながら、当時ユーラシア大陸の東西を結ぶ重要な交通路(いわゆるシルクロード)の要衝を支配下に収めて繁栄した。漢字を複雑にしたような西夏文字がこの国で創られたことは一般にも知られていよう。私はその西夏文字で書かれた古文献を史料として利用し、主に西夏と諸外国との貿易史を中心に研究している。今からおよそ百年前、ロシアの探検隊がカラホト(現在の中国内蒙古自治区エチナ旗)の西夏時代の遺跡を発掘し、膨大な数の文献や絵画資料を持ち帰った。これらの文献は現在、ロシア科学アカデミー東方学研究所サンクト・ペテルブルク支部(以下、研究所と略す)の文献室に保管されている。西夏の歴史を物語る文献は、イギリス、中国、日本などの国々にも収蔵されているが、数の多さや文献のジャンルの豊富さにおいてロシアのものが他を圧倒している。この研究所は西夏の文献の宝庫であるといっても過言ではない。収蔵文献のうち、主要なものは近年、写真版として公刊されてはいるが、私はあくまで文献の現物を閲覧するため、日本からも、そして西夏国のあった地域からも遠く離れたロシアの西端までやって来たのである。

ソビエト連邦崩壊後、収蔵文献は諸外国の研究者にも広く公開されるようになった。とはいえ、何の約束もなしに研究所を訪ねても相手にされない。文献を研究所以外の者に閲覧させるかどうかは、研究所側の判断・厚意に委ねられている。よって研究所に訪問・閲覧の許可を事前に取り付けることが現地調査の第一歩である。私の現地調査の場合、過去に調査経験のある研究者を通じて研究所長・文献室長の許可を取り付け、二〇〇三年二月に実現のはこびとなった。

研究所の文献室が開いているのは月・水・金曜の十一〜十三時・十四〜十六時。極めて短時間であり、効率良い調査の実施が求められる。現地で問題の箇所をピンポイントで調査するために、訪問の前に所蔵目録で自分の閲覧したい文献の整理番号を控える、公刊されている写真版で判読できない箇所をチェックしておく、といった準備が欠かせない。また文献室側の都合で、自分の見たい文献が閲覧できない場合も想定されるため、第二、第三の閲覧候補も用意しておく。調査開始後も、閉室日には前日に集めたデータの整理・読み直しをし、次の開室日の作業方針を練るなどの「予習・復習」作業が必要になる。

以上のような準備作業を整えた結果、現地での調査は順調に進んだ。そして写真版ばかりに頼っていてはわからない新たな知見が得られた。写真版では判読のできなかった文字が実際にはうっすらと書かれていたり、今まで文字の一部だと思っていた写真版の黒い部分が、ゴミや破損のため

佐藤貴保(さとう・たかやす)
COE特任研究員。2004年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。専門分野は東洋史学。おもな業績に「西夏法典貿易関連条文訳註」(『シルクロードと世界史』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」2002・2003年度報告書、2003年)など。

に黒く見えているに過ぎず、実は全く別な意味の文字であったりする例が少なくなかった。西夏の文献の多くは西夏文字で書かれるが、筆画の複雑な西夏文字は、「点」や「横棒」の数、あるいは「はらい」の始点の位置や角度など、わずかな字形の違いで、全く別の意味の文字に変わってしまうのである。

写真版として公刊されていない文献にも出会った。これまで写真版では欠損していたり判読が困難であったりする箇所が、未公刊の文献によって補える場合もしばしばあった。なかには写真版ではまるまる一ページ分掲載し忘れている文献も見つかった。不完全な写真版を基に翻訳・考察を行なってきた従来の研究は今後再検討を迫られるであろう。そして文献の内容・用途・作成年代によって紙質（色・厚さ・漉き縞）が異なることも明らかになった。紙そのものが文献の性格を知る手がかりとなりうるのである。

写真やホームページなどの映像媒体によって、私たちは現地に行かずとも文献をたやすく閲覧できるようになった。しかし不鮮明な箇所の判読や紙質などの情報は、現物をじかに見ないかぎりわからない。映像だけでは、すべての情報は伝わらないのである。私が古文献の実見調査にこだわる理由はそこにある。そして現地調査で得た情報をいかに正確に伝え、他の研究者と共有していくか、それが古文献を研究する私に与えられた課題である。

ロシア科学アカデミー東方学研究所サンクト・ペテルブルク支部

西夏文字の例
少しの形の違いで意味が全く異なってくる。
意味：①価格、②遠い、③挙げる、④準備する

〝実験〟美術史学？
―シャガール的源泉を求めて―

樋上千寿

「ハセネ・タンツ（結婚式のダンスWedding dance）」で始まり、「ドナ・ドナ（子牛の歌）」を合唱し、「ミル・ザイネン・アレ・ブリーデル（みな兄弟 We are all brothers）」で締めくくる東欧ユダヤ音楽「クレズマー」の演奏会も六月十四日の阪大公演（第六回「モダニズムと中東欧の芸術・文化」研究会）で計五回を数えた。「シャガールが聴いた音楽」という副題をつけた一連の演奏会はそもそも、私が研究テーマとしているシャガールの芸術的源泉を、目と耳で確認しなおす〝実験〟という位置づけで始めた研究発表の一形態である。マルク・シャガール（Marc Chagall, 一八八七～一九八五）といえば、色とりどりの花々や空飛ぶ恋人たちが放つラブリーでオシャレなフレンチ・アート、というイメージが強いだろう。おそらくそのイメージは美術館での展覧会よりはむしろ、日本の商業主義的な美術マーケットで醸成されてきたものと思われる。

私が仲間のミュージシャンとともに行う〝実験〟（演奏会）は、とくにシャガールの初期作品に多く描かれた音楽家たち――東欧ユダヤ人の集落「シュテートル」の結婚式で演奏した器楽演奏家クレズマーたち――が実際に演奏していたと思われる音楽を、作品を鑑賞しつつ実際に演奏し、聴いてもらうというものである。自分の演奏にまだまだ余裕がなく、作品とどのように共鳴し合っているのか、あるいは不協和音を奏でているのか、実感するのは困難であるが、少なくともオシャレでラブリーなシャガール・イメージは大幅に修正されましたという〝実験結果〟（聴衆の反応）は多く得られている。

「シャガール研究」――それは十九世紀末から二〇世紀の大部分を奇跡的に生き抜いた、ロシア系ユダヤ人であり芸術家であったひとりの人物の生い立ちに寄り添う作業である。九十七年という長い生涯にわたって常に新しくて普遍性を持つ独自の芸術を創造するために、白ロシアのヴィテブスクから、キュビズムをはじめ真新しいモダン・アートが絢爛と咲き始めたパリへ、ユダヤ芸術再生のためにモスクワへ、そして再びパリへと移動・越境を繰り返したシャガールは、同時に、一八八〇年代の東欧でのポグロム（反ユダヤ暴動）の記憶、第一次世界大戦とロシア革命、ナチズムと第二次世界大戦という不可抗力による移動・越境――合衆国への亡命も含め――も強いられた。ディアスポラ（離散）の果ての地「シュテートル」に生まれた彼は、現在南仏ニース近郊のサン・ポール・ド・ヴァンスの丘の墓地にキリスト教徒とともに眠っている。このことは、ユダヤ人芸術家シャガールの不可解さを端的に象徴しているように思われる。

西欧キリスト教文化を主流とする西洋美術史の領域内では、シャガール研究を進めようとしてもすぐさま壁にぶつかる。私がシャガール研究の当初から取り組んだのはむしろ、その西欧キリスト教文化と常に緊張関係にあったユダヤ教である。一四九二年にカトリック・スペインを追放されたユダヤ人がディアスポラの地で紡ぎ続けたユダヤの伝統が、やがて異端的で神秘主義的なユダヤ教解釈『カバラ』を生み出し、それが度重なるポグロムに苦しむ東欧ユダヤ人の心を捉え、ハシディズム※へと発展していく。シャガールの芸術世界には『聖書（トーラー）』の正統的ユダヤ教世界よりむしろ、東欧のシュテートルで育まれたハシディズムの神秘主義的なユダヤ教世界が色濃く反映されている。図像を忌み嫌い、器楽演奏を禁じる厳格なユダヤ的感覚は青年シャガールにはなかった。抑圧から精神を解き放つためのイ

樋上千寿（ひのうえ・ちとし）

1966年京都市生。同志社大学大学院文学研究科美学及び藝術学専攻博士後期課程単位取得退学。2004年4月より大阪大学21世紀COEプログラム特任研究員、「モダニズムと中東欧の芸術・文化」班所属。大学在学中よりジャズ演奏活動を行う。2002年秋東欧ユダヤ音楽クレズマーのユニットを結成、以来国内各地で演奏活動を展開中。主要業績「シャガールの修復（ティクーン）」『民族藝術』第19号、民族藝術学会編、2003年など。

ディッシュ的冗舌、華々しい音楽と輪舞。これらがシャガール芸術の源泉になったにちがいない、そう気づいたとき、副業として続けてきた私の音楽演奏活動が自然とこの研究と結びついたのである。

おそらくはユダヤ学に対する認識の希薄さ、無理解あるいは誤解が原因なのだろうか、日本の大学にはまだユダヤ学を専門に扱う研究部門はない。したがって私が主たる研究の場としてきたのは在野の研究団体、「神戸・ユダヤ文化研究会」である。「ユダヤ」をキーワードに、歴史学のみならず、神学、文学、哲学、経済学、法学、医学、心理学などさまざまな分野で活動する研究者、学生や主婦、OL、企業家、演奏家などが毎月神戸に集い、文化講座や読書会を開く。まさにインターフェイスな研究会である。多分野の専門家と非専門家が一堂に会し、そして柔軟な議論が展開される在野の研究会だからこそ、実験的な研究形態である「シャガールが聴いた音楽・クレズマー演奏会」は生まれた。芸術解釈のプロセスにおいて、一定の成果を論文という文章以外の形式で発表すること――それを「実験美術史学」などとあえて名付ける必要があるかどうかは別にして――これも、研究対象の本質をより明らかにするという目的に適うものとして提案したい。

※ハシディズム：中世ユダヤ教神秘主義カバラの流れを汲む神秘主義的信仰でシュテートルの生活の隅々までを支配していた。毎週の安息日や祝祭時、結婚式などの席で繰り広げられる歌と踊りによって魂の昂揚を得て神に近づくことができる、と考えられた。厳格な律法主義の対極にある民衆信仰。

第6回「モダニズムと中東欧の芸術・文化」研究会　クレズマー・コンサート
(2004年6月14日)にて。
左、右：シャガールの絵について説明している。中央：演奏中の筆者。
コンサートの一部は下記サイトにてご覧いただけます。
http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/mce_0614hinoue/

《編集後記》

「インターフェイスの人文学」も、はや3年目に入りました。

これからはいわば後半戦、新しい人文学研究の具体的な姿を提示していかなければなりません。巻頭の「研究集合」宣言は、そのためのマニフェストとしてお読みください。

藤田治彦先生にアドバイスをいただいた特集「モノの人文学」、ベテラン編集者の石川泰子さんの応援をいただいての研究グループ取材や若手インタビューなどをとおして、雑誌づくりの楽しみに夢中になっているうち季節は移り、キャンパスはいつのまにかセミしぐれです。(M)

大阪大学21世紀COEプログラム
「インターフェイスの人文学」ニューズレター
Interface Humanities　04

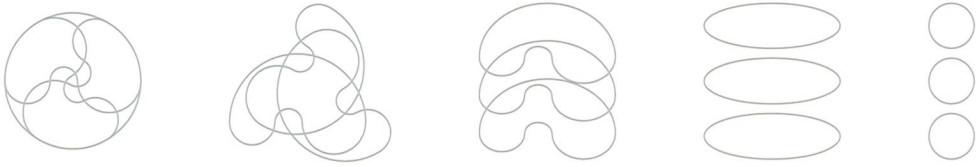
発行＝「インターフェイスの人文学」研究開発委員会
編集長＝三谷研爾
編集＝永田靖　金水敏　山中浩司
ロゴデザイン＝奥村昭夫
編集協力・デザイン＝彩都メディアラボ株式会社
レイアウト＝西田優子　清水良介
印刷＝岡村印刷工業株式会社

発行日＝ 2004年7月30日

連絡先＝〒560-8532　豊中市待兼山町1-5
大阪大学大学院文学研究科内
「インターフェイスの人文学」事務局
Phone: 06-6850-6716
Fax : 06-6850-6718
http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/
coe_office@let.osaka-u.ac.jp

Osaka University
The 21st Century COE Program Newsletter
Interface Humanities　04

Published by COE Committee Interface Humanities
Chief editor: Kenji MITANI
Editors: Yasushi NAGATA, Satoshi KINSUI, Hiroshi YAMANAKA
Logo Designer: Akio OKUMURA
Editorial advisor: Saito Media Lab Co., Ltd.
Layout: Yuko NISHIDA, Ryosuke SHIMIZU
Printed by Okamura Printing Industries Co., Ltd.

Published on July 30, 2004

Contact address: Interface Humanities Office
School of Letters, Osaka University
1-5 Machikaneyama-cho, Toyonaka, Osaka 560-8532
Phone: +81-6-6850-6716
Fax: +81-6-6850-6718
http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/
coe_office@let.osaka-u.ac.jp